

はじめに

本巻には正木直彦校長時代の中期にあたる大正九年から第二次大戦後東京芸術大学が発足して東京美術学校が廃止となる昭和二十七年までの三十二年間の事項を収録した。その構成は前巻と同様に編年体であるが、昭和十一年までは前巻に引き続き「東京美術学校年報」の記事を根幹に据え、年報が現存していない同十二年以降は種々の記録資料に基づき、学事の主要事項を抜粋して掲載した。準公式記録といふべき『東京美術学校校友会月報』をはじめとする校友会機関紙の記事を抜粋して掲載したことも前巻と同様である。

収録の期間が長く、また、資料が多く集まったため、第一、二巻と比べて大分ページ数が増えたが、戦中および終戦直後の時期については十分な公的記録がなく、体裁が整わなかった。学史関連の重要事項を「関連事項」に取り上げたことは従来どおりだが、今回、特に編者が鋭意資料発掘につとめ、成果があったと思われるのは次の項目についてである。

外国人留学生 東京美術学校に在籍した二百五十名近い外国人留学生のうち、特に中国、旧朝鮮、台湾からの留学生たちが、帰国してそれぞれの国の近代美術の担い手となった事実は、近年それらの国々およびわが国の研究者によって明らかにされつつあり、彼らとの相互協力により必要な資料を入手することができた。

学生思想問題およびプロレタリア美術運動 本項については新資料の発見や提供が得られた。

工芸技術講習所 これは東京美術学校の工芸部と姉妹関係にあった機関である。纏まった資料が現存し、また、関係者の熱心な協力があったため、創設から廃止に至る経緯をつぶさに把握することができた。

昭和十九年の東京美術学校改革 殆ど伝説化している本件については改めて資料発掘につとめ、種々の新資料を得たので、可能な限り詳細に記述した。

戦中、戦後の諸事項 上述のようにこの時期は公的な記録資料が少なく、学事の全体を十分に把握しえない。そこで極力関係者に呼びかけて証言や資料を集めた。別巻として刊行する『上野直昭日記』はその一つで、これは上野直昭が昭和十九年から二十八年までの間、東京美術学校長、東京芸術大学学長としての公務の傍ら記した日記であって、激動の時代の貴重な記録として広くさまざまな角度から読まれるべきものであると同時に、学史の空白を埋める記述を多く含んだ重要な資料と言えよう。なお、資料蒐集の結果、学史のある部分については予想外に多くの資料が集まった。なかでも男女共学、第一回芸術祭その他の特記すべき数項目について好資料が得られ、図版も充実したのは幸いであった。ただし、折角提供された資料の多くを紙面の関係で割愛せざるを得なかった。

